

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0216 NO96

校長 伊波喜一

失敗を 繰り返しても 立ち上がる 恐れず進む 生きる証か

平昌五輪も中盤となった。個人・団体を問わず、熱戦から目が離せない。百戦錬磨のアスリート達でさえ、培った力を出し切れずに悔し涙を流している場面を目にすると、平常心を保つことがいかに難しいか、分かれようというものだ。 **失敗学**という学問がある。成功体験の陰には、大なり小なり失敗体験があることを調べた学問だ。私達は失敗して悔しい思いをすることで内省し、新しいやり方を受け入れる素地が出来上がる。上手くないかなった時ほど、伸びしろがあると言えようか。 **柔道家・古賀稔彦**は大怪我を克服し、メダリストになった。曰く「選手が成長できるかできないかの分岐点は、欠点を自分で認められるかだ。人は誰でも自分の欠点は認めたくない。都合の悪いところは避けて通りたい。でも、欠点をそのままにしておくと、それがいずれ成長の足かせになる日が来る。だから、常に欠点を乗り越えていかないと、前に進めない。自分の欠点に気がついているからこそ、常に成長していける」。 **欠点を失敗**と読み替えてみると、失敗から学ぶことの大きさに気づかざるを得ない。